

『干禄字書』と『類聚名義抄』の漢字字体の比較

Comparison of the style of Chinese characters between “Kanrokujisho” and “Ruijumyogisho”

田村 夏紀

TAMURA Natsuki

1、はじめに

唐の『干禄字書』は字体字書として日本に伝わり、平安・鎌倉時代の古辞書『類聚名義抄』に引用された歴史がある。これまで、平安時代の図書寮本『類聚名義抄』に記された、略称「干」を伴う記載を手がかりに、両辞書の関係が研究されてきた。また鎌倉時代に改編された観智院本『類聚名義抄』にも、出典名は記されていないが、『干禄字書』と共通する字体注記があるため、記載内容が比較されてきた。しかし、漢字と字体注記の記載形式に注目して比較されてきたので、まだ漢字字体そのものの比較はおこなわれていない。そこで本稿では、『干禄字書』、図書寮本『類聚名義抄』、観智院本『類聚名義抄』の3辞書の漢字字体を比較することによって、辞書の関係をさらに追究し、引用関係にある辞書間の字体の変容の実態を明らかにしたい。

『干禄字書』は唐の顔元孫が撰述し、甥にあたる書家の顔真卿が清書し、774年に石刻されたものが元になっている。現在は顔真卿の石碑は失われ、後世に模刻された石碑の拓本が伝わっている。日本では平安時代の『日本国見在書目録』(891年頃成立)に「干禄字様」という書名が見え、同様の書が早くから伝わっていたことは確かだが、『類聚名義抄』の編者が使用した本は、現在伝わっていない。江戸時代には、複数の系統の『干禄字書』が出版された。その中で文化14年(1817)刊の『干禄字書』は、昌平坂学問所による官板として広まり、中国の石碑の拓本と似通った筆書きの書体を伝えている。そのため、文化14年刊の『干禄字書』を使用することにした。⁽¹⁾

図書寮本『類聚名義抄』は、平安時代末期(1102年以降)の書写と推定され、120部首のうち約20部首が伝わる零本である。⁽²⁾観智院本『類聚名義抄』は、鎌倉時代中期(1251年以降)の書写と推定され、『類聚名義抄』諸本の中で唯一の完本である。⁽³⁾今回調査した3つの資料自体に、直接の引用や転写という関係はないが、現存する比較可能な最良の資料だと考えられる。別系統の『干禄字書』の存在や、観智院本『類聚名義抄』が転写を経た資料であることも考慮に入れて、比較をおこなうことにする。

3辞書の関係については、例えば次に示すように、常用漢字の「継」を「通」とし、旧字体の「繼」を「正」とする記載が記されている箇所を比較すると、『干禄字書』と、『類聚名義抄』2本の正字の字体には差異が認められる。(音義の注記などは一部省略し、対応する記載を□で囲み、字体の差異の特徴を手書きで示し○で囲む)

用例1 「継・繼」字

『干禄字書』
(38オ2)



図書寮本『類聚名義抄』
(300・7)



観智院本『類聚名義抄』
(法中 113・5)



『干禄字書』では、旧字体と同じく「L」の中の「纛」4つを「一」で上下に仕切る形であり、図書寮本と観智院本では、「L」と「纛」2つが上下に2回ある形であり、字体が異なる。このように、『干禄字書』とは異なる漢字字体が、『干禄字書』を出典とする漢字として図書寮本に記され、観智院本にも受け継がれている場合がある。3辞書の漢字字体の差異の特徴を調べて、字体に差異が見られる理由を明らかにしたい。

2、『干禄字書』と『類聚名義抄』の諸本について

『干禄字書』は唐の顔元孫が撰述し、甥である書家の顔真卿が清書し、唐の大暦9年(774)に浙江の湖州で石刻された。その後石碑が欠けてきたため、唐の開成4年(839)に湖州に官吏として赴任した楊漢公が模刻した。後に南宋の紹興12年(1142)に宇文時中が、顔真卿の本と楊漢公の本を元に模刻し、南宋の宝祐5年(1257)に陳蘭孫が楊漢公の本を元に模刻し、それぞれ蜀に置かれたと伝わる。唐の顔真卿や楊漢公の石碑を元にした湖本系と、南宋に宇文時中や陳蘭孫が模刻した蜀本系の2系統があり、中国の『干禄字書』にも文字の相違があったという。⁽⁴⁾ 中国で出版されたものとして、説郭本(明、1647年刊)、後知不足齋本(清、1882年刊)などがある。日本で江戸時代に出版されたものに、宝永4年本(1707年跋文)、寛延井上本(1750年刊)、文化14年本(1817年刊)などがある。本稿で使用した文化14年刊本は、湖本系とされる清の後知不足齋本を元にしていう。

『類聚名義抄』の諸本は、原撰本系統と改編本系統の2つに分類される。原撰本系統の図書寮本は、仏典の難読熟語の解説書という性格を持ち、熟語を見出し語として出典名を記した漢文で解説が書かれ、万葉仮名とカタカナで和訓が示されている。改編本系統の観智院本は、漢和辞書という性格が強くなり、単漢字を見出し字として出典名は省略し、カタカナの和訓と異体字を増やしている。改編本系統には、いずれも一部が欠けた本である

が、高山寺本（鎌倉時代書写）、鎮国守国神社本（鎌倉時代末期から南北朝期書写）、西念寺本（江戸時代書写）などの諸本がある。本稿で使用した完本である観智院本の奥書には、「作者自筆草本」をもとにして、仁治2年（1241）に「釈氏慈念」が書写し、建長3年（1251）に「沙弥顕慶」が「一筆書写」したと記されている。現存本は2人で分担して書写されており、少なくとも3回の転写が行われたものである。⁽⁵⁾

3、先行研究

吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷」（1954）、池上禎造『校本干禄字書』（1961）、橋本不美男「図書寮本類聚名義抄出典索引」（1976）には図書寮本『類聚名義抄』の中に見られる『干禄字書』を出典とする用例が記されている。⁽⁶⁾

西原一幸（1987）⁽⁷⁾では、図書寮本に引用された『干禄字書』の用例は、字体の正俗と類似字形別字の弁別を合わせて143例あり、『干禄字書』から直接引用されたものと推定している。また『干禄字書』の「上俗下正」という代表的な字体注記に対して、「下正」を省略した「上俗」という注記が多いことから、異体字を積極的に提示する『干禄字書』の特徴を、図書寮本は受け継いでいると指摘している。

池田証寿（1992）⁽⁸⁾では、正俗で部首が異なる『干禄字書』の用例字は、図書寮本に引用される場合に、俗の部首の方に記される場合が多いことを指摘し、『干禄字書』の9割が図書寮本に引用されていたと推定している。また図書寮本と観智院本では注記の形式が異なる場合があり、『干禄字書』の規範の受け入れ方が異なることを指摘している。

拙稿（1992）⁽⁹⁾では、『干禄字書』の正字・異体字2字体を対比する用例613例について、字体の差異を類型化した。「繼・継」のように「部首以外の構成要素が、類似した構成要素に変化する関係」が最も多く48%を占め、次に「阪・坂」のように「部首が別の部首に交替する関係」が24%あることを示した。交替する部首の種類は「シ→レ」のように、類似した形で画数が減る場合が多いことを示した。

拙稿（1997）⁽¹⁰⁾では、『干禄字書』の正字・異体字が図書寮本に引用された118例のうち、111例（94%）の字体注記の種類と形式に共通性が見られることを示した。一方観智院本では、『干禄字書』と共通性が見られるのは81例（69%）であり、字体注記の種類が異なるなど、図書寮本と比べて『干禄字書』との共通性が低いことを示した。

拙稿（1998）⁽¹¹⁾では、『干禄字書』の正字・異体字に関する記載704例を観智院本と比較し、字体注記の種類と形式が一致するものは121例（17%）、記載形式は異なるが字体注記に共通性があるものは268例（38%）、字体注記が異なるものは161例（23%）あることを示した。

これらの研究をふまえ、本稿では漢字の字体に注目して比較する。

4、『干禄字書』・図書寮本『類聚名義抄』・観智院本『類聚名義抄』の漢字字体の比較

4-1 調査対象とした用例

『干禄字書』全体の構成は次の通りである。全体の804例のうち、漢字字体の差異を明

確に示すものは704例ある。このうち、図書寮本に「干」という略称があることや、記載形式に共通点があることから、『干禄字書』から図書寮本に引用されたことが明らかな118例を調査対象として取り上げる。図書寮本は全体の6分の1ほどが伝わる資料であるため、比較可能な用例数は『干禄字書』の704例中の6分の1程度(17%)になっている。118例に対応する観智院本の記載内容も取り上げる。

| | |
|------------------------------|------|
| 『干禄字書』全体 | 804例 |
| 1、漢字字体の差異を明確に示すもの | 704例 |
| ① 2字の正字・異体字関係を示すもの(上俗下正など) | 613例 |
| ② 3字の正字・異体字関係を示すもの(上俗中通下正など) | 45例 |
| ③ 2字の正字・正字関係を示すもの(並正) | 46例 |
| 2、類似字体別字の音義の違いを示すもの | 100例 |
| ④ 音義の違いのみを示すもの | 78例 |
| ⑤ 字体に関わる注記(亦作など)を伴うもの | 22例 |

なお、「字体」の定義としては「書体内において存在する一々の漢字の社会共通の基準」であり、「文字を構成する線や点などの基礎的な構成単位の組み合わせ方の方式の基準」であるとする。また「異体字」の定義としては「表音・表意の機能の上で同一で、しかも同一文脈における同一位置において相互代替の可能な関係にある別の字体にもとづく文字」であるとする。⁽¹²⁾ 3辞書の字体を比較する際には、互いに同音同義の別字体と判断できる字体という意味で「異体字」という言葉を使う。漢字字体に差異があると判断する場合、画数に違いがあること、単なる筆の勢いではない点画の形状に違いがあることに着目する。表1に、3つの辞書に対応する用例数が118例であったことを示す。

表1 『干禄字書』・図書寮本・観智院本に対応する用例

| 字体の関係 | 干の全用例 | 対応する用例 |
|--------|------------|-----------|
| 2字の正・異 | 613 | 96 |
| 3字の正・異 | 45 | 6 |
| 2字の正・正 | 46 | 16 |
| 合計 | 704 (100%) | 118 (17%) |

表2に示すように、3辞書に対応する用例118例について、漢字字体を比較した結果、72%にあたる85例に字体の差異が認められた。

表2 対応する字体に差異があるもの

| 字体の関係 | 差異があるもの | 差異がないもの | 合計 |
|--------|----------|----------|------------|
| 2字の正・異 | 69 | 27 | 96 |
| 3字の正・異 | 5 | 1 | 6 |
| 2字の正・正 | 11 | 5 | 16 |
| 合計 | 85 (72%) | 33 (28%) | 118 (100%) |

1つの用例の中には、複数の漢字が含まれているため、字体に差異のある用例85例の中で、字体の差異がある漢字を調べたところ、表3に示すように117字に差異が見られた。

表3 字体に差異がある用例字数

| 字体の関係 | 用例数 | 用例字数 |
|--------|-----|------|
| 2字の正・異 | 69 | 95 |
| 3字の正・異 | 5 | 6 |
| 2字の正・正 | 11 | 16 |
| 合計 | 85 | 117 |

字体に差異が見られた117字の漢字について、3辞書の関係を次に示していく。

4-2 『干禄字書』・図書寮本・観智院本の漢字字体の対応関係

『干禄字書』と図書寮本と観智院本の対応する漢字字体を比較したところ、(1)観智院本だけ字体が異なるもの、(2)『干禄字書』だけ字体が異なるもの、(3)図書寮本だけ字体が異なるもの、(4)3本とも字体が異なるもの、の4種類の関係が見られた。

正字と異体字の2字の対比、3字の対比、正字2字の対比、という違いに関わらず、3辞書の対応する正字どうし、異体字どうしに違いが見られるかを比較した。

3つの辞書の漢字字体の関係について、○と●は字体に差異があり、○と●と▲も字体にそれぞれ差異があるものとして、表4に模式図と用例数を示す。

表4 3辞書の字体の差異の関係

| 干・図・観 | 用例字数 |
|-----------|------------|
| (1) ○ ○ ● | 39 (33%) |
| (2) ○ ● ● | 35 (30%) |
| (3) ○ ● ○ | 13 (11%) |
| (4) ○ ● ▲ | 30 (25%) |
| 合計 | 117 (100%) |

(1)の観智院本だけ字体が異なるものが最も多く39字ある。(3)の図書寮本だけ字体が異なるものが最も少なく13字である。『干禄字書』と図書寮本の字体に差異があるのは(2)(3)(4)を合わせた78字であり、『干禄字書』と観智院本の字体に差異があるのは(1)(2)(4)を合わせた104字である。『干禄字書』と図書寮本の方が近い関係にあると考えられる。

次に、それぞれの項目の漢字の具体例を示し、特徴を述べる。

(1)観智院本だけ字体が異なるもの

観智院本だけ字体が異なるものは39字あった。字体が異なる特徴として、①観智院本は異体字を書いているもの、②観智院本は画数や点画の異なる別の字体を書いているもの、③観智院本の誤写であるもの、という3つに分類した。異体字だと判断する根拠は、辞書等に字体の異なる両方の字が載っていることによる。②は異体字か誤写か現時点で判断できないものである。表5に用例数を示す。なお、1字の中に差異の特徴が複数見られる場合もあるので、差異の特徴の用例字数の合計は、実際の用例字数より多くなる可能性がある。

表5 観智院本だけ字体が異なるものの特徴

| 観智院本の差異の特徴 | 用例字数 |
|-------------|------|
| (1)-①観は異体字 | 25 |
| (1)-②観は別の字体 | 7 |
| (1)-③観の誤写 | 8 |
| 合計 | 40 |

次に用例の一部をコピーによって示し、字体の異なる部分を手書きで示し○で囲む。字の大きさが同等になるように倍率を調節している。表の中に、『干禄字書』の字体注記の種類と、それぞれの用例の所在を記す。



















用例(1)-① 観智院本は異体字を書いているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---|--|--|---|---|---|
| 潔 ケツ |  正 47 才 1 |  67.6 |  法上 44.1 |  |  |  |
| 隘 アイ |  俗 38 ㄩ 2 |  200.2 |  法中 42.7 |  |  |  |
| 憑 ヒョウ |  正 26 才 1 |  68.1 |  法上 46.8 |  |  |  |
| 満 マン |  正 30 ㄩ 2 |  58.3 |  法上 41.5 |  |  |  |
| 陰 イン |  通 25 才 4 |  209.5 |  法中 38.1 |  |  |  |
| 歡 カン |  正 18 才 3 |  246.6 |  法中 89.3 |  |  |  |

「潔」字の「絜」の左上の部分は、観智院本は「生」で、他の本は「生」の「ノ」が欠けた現在と同じ形である。「隘」字の右下は、観智院本は「血」で、他は現在と同じ「皿」である。「憑」字は、観智院本は「馬」の「𠂔」がつながった「一」である。「満」字は、観智院本は4点で、他は「人」が2つである。「陰」字は、観智院本は「ノ」で、他は「人」の形である。「歡」字は観智院本は「一」で、他は「口」2つである。なお「潔」字の用例には、観智院本では「𠂔」を「𠂔」に誤写するという③の特徴も同時に見られる。



















異体字だという根拠としては、例えば「隘」字の「益」にあたる部分について、『干禄字書』に「皿」を「正」とし、「皿」の上に「一」があるものを「通」とする記載(47ウ4)があるので、「隘」字についても類推して、観智院本の字が異体字だと判断した。「歡」字は観智院本(僧中49.5)に、「口」2つがある字体を「正坎」として、両方の字体が載っているの、観智院本の字を異体字と判断した。

用例(1)-② 観智院本は別の字体を書いているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|---------|---|--|---|---|---|---|
| 誇 コ |  通 22 才 2 |  88.7 |  法上 69.8 |  |  |  |
| 囊 ノウ |  正 23 才 4 |  342.4 |  法中 143.2 |  |  |  |
| 足 ソク |  正 45 才 1 |  102.1 |  法上 73.1 |  |  |  |

「誇」字は、右下の部分に1画付け加わっている。「囊」字は、中央部の縦線が2本足りない。「足」字は「口」の底辺の両端が長い。これらは、字体が異なると判断したが、異体字だという明確な根拠がないものである。

用例(1)-③ 観智院本の誤写であるもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---|--|---|---|---|---|
| 氷 ヒョウ |  正 26 才 2 |  65.1 |  法上 44.5 |  |  |  |
| 章 ショウ |  通 23 才 1 |  124.6 |  僧下 120.8 |  |  |  |
| 馮 ヒョウ |  正 10 才 1 |  66.1 |  法上 47.2 |  |  |  |

「氷」字は、観智院本では「氷」を2回続けて書くという誤写をしており、他の本では正字を「氷」と書いている。「章」字は、観智院本では「章」を2回続けて書く誤写をし

ており、他の本では「日」の部分が「田」となる異体字を書いている。「馮」字は、「冫」が正字で、「彳」が異体字だが、観智院本は正字と異体字を逆に書く誤写をしている。

(2) 『干禄字書』 だけ字体が異なるもの

『干禄字書』 だけ字体が異なる35字を、差異の特徴によって、①図書寮本と観智院本が異体字を書いているもの、②図書寮本と観智院本が別の字体を書いているもの、③図書寮本と観智院本の誤写であるもの、④『干禄字書』の誤りであるもの、の4つに分類した。図書寮本と観智院本の類似性が強い用例である。

表6 『干禄字書』 だけ字体が異なるものの特徴

| 『干禄字書』の差異の特徴 | 用例字数 |
|---------------|------|
| (2)-①図と観が異体字 | 16 |
| (2)-②図と観が別の字体 | 13 |
| (2)-②図と観の誤写 | 3 |
| (2)-④干の誤り | 3 |
| 合計 | 35 |

用例(2)-① 図書寮本と観智院本が異体字を書いているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---|---|---|---|---|---|
| 繼 ケイ |  正 38 才 2 |  301. 2 |  法中 113. 5 |  |  |  |
| 惡 アク |  正 49 才 3 |  249. 4 |  法中 75. 8 |  |  |  |
| 鄒 スウ |  正 25 才 1 |  185. 1 |  法中 33. 4 |  | 小 小 | 小 小 |
| 澁 ジュウ |  俗 49 才 4 |  39. 1 |  法上 19. 6 |  | 止 止 | 止 止 |
| 愁 ギン |  正 39 才 2 |  269. 1 |  法中 99. 6 |  | 来 来 | 来 来 |
| 塩 エン |  通 25 才 3 |  233. 5 |  法中 68. 1 |  | 田 田 | 田 田 |

「繼」字は、『干禄字書』は旧字体と同じ形だが、『類聚名義抄』2本では、「L」の中に

「𠂔」が2つ入った形が上下に2つある。「惡」字は、『干禄字書』は旧字体と同じく「亞」の形だが、他の本は上部の横線が短く、画数が1画少ない。「鄒」字は、『干禄字書』は現在と同じ字体で、他の本は「冫」の内部が「小」になっている。「澁」字は、『干禄字書』は「止」の草書体で、他の本は「止」である。「慙」字は、「來」と「来」の違いがある。「塩」字は「日」と「田」の違いがある。

「繼」「惡」「鄒」「慙」字のように、『干禄字書』の方が本来の正しい字体である場合が多く見られる。「慙」字の「來」の部分については、観智院本に、「來」が「正」、「来」が「今」とする記載（僧下81.2）があり、『類聚名義抄』の方が異体字だと類推できる。

用例(2)-② 図書寮本と観智院本が別の字体を書いているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|---------|-------------|------------|--------------|---|---|---|
| 儒 ジュ | 愼 通 40㊦1 | 愼 270.1 | 愼 法中 75.6 | 而 | 丙 | 丙 |
| 壑 カク | 壑 俗 49㊦3 | 壑 230.7 | 壑 法中 62.1 | 土 | 工 | 工 |
| 壑 カク | 壑 正 49㊦3 | 壑 230.7 | 壑 法中 62.1 | 止 | 止 | 止 |

「儒」の通字は、「而」の中の部分が「人」のようになっている。「壑」字の俗字と正字は、左上の部分の形状が異なる。

用例(2)-③ 図書寮本と観智院本の誤写であるもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|---------|-------------|------------|--------------|---|---|---|
| 踰 トウ | 踰 通 49㊦1 | 踰 108.2 | 踰 法上 74.7 | 合 | 日 | 日 |
| 鉶 コウ | 鉶 正 33㊦4 | 𠂔 157.2 | 𠂔 法中 2.8 | 金 | 石 | 石 |

「踰」字は、正字と異体字が『干禄字書』と逆に書かれる誤写のため、右上の部分の形状が異なる。「鉶」字は『干禄字書』では、正字が「金偏」の字で、異体字が「石偏」の字だが、『類聚名義抄』2本では正字も異体字も「石偏」で書くという誤写をしている。

用例(2)-④ 『干禄字書』の誤りであるもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|---------|---|---|---|---|---|---|
| 減 ゲン | | | | | | |
| 訊 ジン | | | | | | |

「減」は『干禄字書』では、正字と異体字の両方を「ㇿ」にしており誤りである。『類聚名義抄』2本では、「ㇿ」が正字、「ㇿ」が異体字となっている。「訊」は、文化14年本『干禄字書』は、『類聚名義抄』2本と違う字体だが、宝永4年本『干禄字書』には、『類聚名義抄』と同様の字体が記されている。⁽¹³⁾『類聚名義抄』は文化14年本とは別系統の『干禄字書』を引用しているために字体が異なっている可能性もある。

(3) 図書寮本だけ字体が異なるもの

図書寮本だけ字体が異なるものは13字で、最も用例数が少ない。字体の異なるものの特徴を、①図書寮本は異体字を書いているもの、②図書寮本は別の字体を書いているもの、の2つに分類した。

表7 図書寮本だけ字体が異なるものの特徴



| 図書寮本の差異の特徴 | 用例字数 |
|-------------|------|
| (3)-①図は異体字 | 6 |
| (3)-②図は別の字体 | 8 |
| 合計 | 14 |

用例(3)-① 図書寮本は異体字を書いているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|---------|---|---|---|---|---|---|
| 暫 ザン | | | | | | |
| 蹠 セキ | | | | | | |
| 諧 シン | | | | | | |

「𦉳」字は、図書寮本は「足」で、他の本は草書体である。「𦉳」字は、図書寮本だけ「从」のような形で、他は「𦉳」である。「𦉳」字は、図書寮本だけ「天」で、他は「夫」である。「𦉳」字は『干禄字書』に「足」を「正」、草書体を「通」とする記載（45才1）がある。

用例(3)-② 図書寮本は別の字体を書いているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---|--|---|---|--|---|
| 衷 チュウ |  正 19ウ1 |  339.6 |  法中 137.7 | 中 |  | 中 |
| 褒 ホウ |  正 21才4 |  333.1 |  法中 148.3 | 口 |  | 口 |

「衷」字は、中央部に「一」がある。「褒」字は「子」のようになっている。

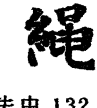
(4) 3本とも字体が異なるもの

3本のそれぞれに違う字体が書かれているものは30字ある。字体の差異の特徴は、①『干禄字書』と図書寮本の差異を、観智院本が受け継いでいる部分があるもの、②『干禄字書』と観智院本には、図書寮本にない共通点があるもの、③3本それぞれ異なる特徴があるもの、④観智院本の誤写が関わっているもの、の4つに分類した。

表8 3本とも字体が異なるものの特徴

| 3本の差異の特徴 | 用例字数 |
|----------------------|------|
| (4)-①干と図の差異を観が受け継ぐ | 23 |
| (4)-②干と観には図にない共通点がある | 6 |
| (4)-③それぞれ異なる特徴 | 4 |
| (4)-④観の誤写 | 4 |
| 合計 | 37 |

用例(4)-① 『干禄字書』と図書寮本の差異を、観智院本が受け継いでいる部分があるもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---|--|---|---|--|---|
| 繩 ジョウ |  正 26才1 |  332.5 |  法中 132.3 |  |  |  |
| 憲 ケン |  俗 39ウ4 |  239.6 |  法下 54.7 |  |  |  |

「繩」字は、図書寮本は縦線2本が上まで伸びない形で、観智院本は上部が「口」になり、縦線が一本になる。「憲」字は、『干禄字書』は「宀」の下に2本「一」があり、図書寮本は2本の「一」の左に「ノ」があり、観智院本は「尸」のような形で、中央部が「面」の下部のような形である。いずれも、図書寮本で少し変化した部分を観智院本は受け継ぎ、さらに変化した字体となっているように見える。

用例(4)-② 『干禄字書』と観智院本には、図書寮本にない共通点があるもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---------------|------------|--------------|--------|---|---|
| 陰 イン | 陰 正 25 才 4 | 陰 209.5 | 陰 法中 38.1 | テ 云 | 云 | 云 |
| 球 キュウ | 球 正 25 才 2 | 球 161.1 | 球 法中 20.2 | 水 | 水 | 水 |

「陰」字の「今」の部分「テ」となる点は、『干禄字書』と観智院本で共通する。それに加えて「云」の上部が「一」となる点は『干禄字書』と図書寮本で共通するため、3本の字体がそれぞれ異なっている。「球」字に「水」があるのは、『干禄字書』と観智院本で共通する。それに加えて「求」の下部が「水」となるのは図書寮本と観智院本で共通するため、3本の字体が異なる。

用例(4)-③ 3本それぞれ異なる特徴があるもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|---------|---------------|------------|---------------|---|---|---|
| 襦 ジュ | 襦 正 14 ウ 1 | 襦 342.6 | 襦 法中 146.2 | 雨 | 雨 | 雨 |

「襦」字の「雨」の4点の部分が、『干禄字書』では4点の形、図書寮本では「雨」が2つの形、観智院本は2点の形、とそれぞれ異なる。

用例(4)-④ 観智院本の誤写が関わっているもの

| 漢字 | 干 | 図 | 観 | 干 | 図 | 観 |
|----------|---------------|-----------|--------------|---|---|---|
| 涼 リョウ | 涼 正 23 才 1 | 涼 66.7 | 涼 法上 46.3 | 涼 | 涼 | 涼 |

「涼」字は、観智院本では2字とも「涼」の字で書かれるという誤写があるため、「涼」で書かれていない。それに加えて『干禄字書』では「京」であるが、図書寮本と観智院本では「口」の部分が「日」となるため、3本の字体が異なっている。

5、まとめ

『干禄字書』と対応する、図書寮本『類聚名義抄』、観智院本『類聚名義抄』の正字・異体字関係を示す用例118例を比較した結果、7割にあたる85例の漢字字体に差異が認められた。85例の中で字体に差異のある漢字117字を取り上げ、どの辞書の字体が異なるのか比較すると、観智院本だけ字体が異なる場合が最も多く39例、次に『干禄字書』だけ異なるものが多く30例で、それぞれ3割を占めた。図書寮本だけ異なるものは13例で比較的少なく1割程度であった。字体の正俗の基準を示す辞書に記された漢字であっても、引用や転写の過程で漢字字体に差異が生じていることが分かる。

差異の特徴の中で最も多かったのは、異体字が書かれるものであった。1つの漢字に複数の異体字が存在することがあるため、書写者の許容範囲内で意識的にまたは無意識のうちに、元の本から引用する際に字体を変えたり、転写を経るうちに字体が変わったりしたと考えられる。また、平安・鎌倉時代に使用された『干禄字書』と、今回比較した『干禄字書』の字体が異なるために、『類聚名義抄』との間に字体の差異が生じた可能性もある。

『類聚名義抄』では『干禄字書』と正字・異体字が逆に記されたり、正字・異体字が同じ字体に誤写されたりすることがあった。観智院本だけの誤りが多く12例あり、図書寮本の誤りを観智院本が受け継ぐ場合も3例あった。観智院本に誤写が多い理由は、複数回の転写を経るうちに誤りが生じて、それが見逃されてきた可能性が高い。

『干禄字書』と図書寮本の字体が違う場合に、観智院本はどちらの字体をより強く受け継いでいるかを見ると、観智院本が『干禄字書』と一致するものは13例、図書寮本と一致するものは35例であった。観智院本の編者は、原撰本系統の『類聚名義抄』に引用されていた『干禄字書』の記載を、『干禄字書』そのものよりも重要視していたと考えられる。

拙稿(1997)で、漢字の記載形式や字体注記に注目して3辞書を比較したところ、『干禄字書』と図書寮本の一致度の方が高く、『干禄字書』と観智院本の一致度の方が低かった。漢字字体についても同様に、『干禄字書』と図書寮本に差異があるのは78字、『干禄字書』と観智院本に差異があるのは104字であり、『干禄字書』と図書寮本の一致度の方が高い。記載形式にも字体そのものにも、辞書間の関係の深さの違いが表れていることが分かった。

今後は、『干禄字書』の石碑の拓本や、他の系統の『干禄字書』の字体とも比較をおこない、『類聚名義抄』の成立時に使用された『干禄字書』がどのテキストに近いものであったのか明らかにしたい。また、平安・鎌倉時代の辞書以外の文献に使用された漢字の字体を調査して、『干禄字書』の正俗の字体規範が、日本ではどのように受け入れられていたのか明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- (1) 杉本つとむ編『異体字研究資料集成』別巻一(雄山閣、1975)による。文化14年官板『干禄字書』には、和泉屋本、出雲寺本、須原屋本の3種類の諸本があるが、同じ版本を用いたと考えられており、字体に差異はないと判断した。本稿では出雲寺

本を使用した。

- (2) 築島裕解説『図書寮本類聚名義抄』(勉誠社、1976)による。
- (3) 正宗敦夫編『類聚名義抄』(風間書房、1955)、天理図書館善本叢書『類聚名義抄』八木書店、1976)による。
- (4) 中国の『干禄字書』での字体の違いについては、池上禎造解説『校本干禄字書』(広島大学文学部国語学研究室、1961)に、「楊州の馬曰璫が湖本を翻刻し蜀本をもって互校して補ふもの八五、改めるもの一六、削るもの二といふやうなこともおこるのである」と記される。『干禄字書』の諸本や系統については、杉本つとむ『改訂増補 漢字入門『干禄字書』とその考察』(早稲田大学出版部、1985)、平野顕昭『顔真卿書籍集成 解説・解題編』(中田勇次郎編、東京美術、1985)による。
- (5) 観智院本の2人の書写者については、草川昇「『類聚名義抄』についての一考察」(津西高校紀要2、1981.1)、佐藤栄作「字形から字体へー『観智院本類聚名義抄』の「ツ」とそれに付された平声点をてがかりに一」(『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院、1992)、小林恭治「観智院本類聚名義抄の筆跡による各帖の類別について」(訓点語と訓点資料94、1994.9)による。『類聚名義抄』の諸本については、吉田金彦「類聚名義抄」(佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院、1977)による。
- (6) 吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷(中)」(訓点語と訓点資料3、1954.12)、橋本不美男「図書寮本類聚名義抄出典索引」(注2の『図書寮本類聚名義抄』の「解説索引篇」所収)による。『校本干禄字書』は注4による。
- (7) 西原一幸「図書寮本『類聚名義抄』所引の『干禄字書』について」(金城国文63、1987.3)による。
- (8) 池田証寿「図書寮本類聚名義抄と干禄字書」(国語学168、1992.3)による。
- (9) 藤田夏紀「『干禄字書』における正字・異体字の類型について」(国文学攷136、1992.12)による。
- (10) 田村夏紀「『干禄字書』と観智院本『類聚名義抄』の比較—図書寮本『類聚名義抄』を介在として—」(国語学研究と資料21、1997.12)による。
- (11) 田村夏紀「『干禄字書』と観智院本『類聚名義抄』の正字・異体字の比較」(国文学研究125、1998.6)による。
- (12) 「字体」の定義については、石塚晴通『図書寮本日本書紀 研究編』(汲古書院、1984)、當山日出夫「金沢文庫本白氏文集『長恨歌』の漢字字体の実態—漢字字体規範データベースを利用して—」(立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要、白川静先生追悼記念号2、2008.3)による。「異体字」の定義については、山田俊雄「異体字」(『国語学大辞典』国語学会編、1980)による。
- (13) 注4の『校本干禄字書』、『改訂増補 漢字入門『干禄字書』とその考察』による。

Received :October, 3, 2018

Revision received : November, 20, 2018

Accepted :December, 5, 2018